被災体験

岡本君江（二宮・76歳）

東京深川で高等小学校を終え十代で結婚し長男次男と小学校に入学し三人目を妊娠中、日米戦争が始まり主人は應召して行きました。三月十日の空襲で三人の子供を連れて逃げまどい、命だけは助かりました。

たった一人の母親は命を落してしまいました。家は焼かれ、行く先のない私達は兄妹のない私は頼る所もなく埼玉の叔母の家にたどりつきました。三人の子供を連れていては置いてもらえず、子供の学童疎開先の新潟県の円明寺といふお寺で半年ほどお世話になり終戦と同時に主人の故郷茨城で一軒の家を借りて生活を始めました。収入のない私は衣類をお米に換え野草を食べて生きてきました。その間五年間長い長い年月でした。戦地から主人が帰ってきました。戦友は栄養失調で船中で命を落としてしまったとの事、帰ってこられた事は幸運といわねばなりせん。主人も東京に出て職を求め安定してから、私達も東京に戻り五人目の息子が小学三年生の時三十五年十二月に現在の場所に土地を求め、家を建て、何とか安定した生活が出来る様になりました。

その主人も四十四年に他界しました。五十七才の短かき人生でした。

戦争は二度とあってはならない。七十六才になる現在でもその事は私の脳裏から消えさせることは出来ません。

現在は息子夫婦孫達と平穏な毎日を過ごしております。